

## 天石神社の狛犬あまいし こまいぬ

狛犬は、魔除けや神仏の守護役として神社の境内などに据え置かれていたものです。平安時代から多く作られるようになり、古くは神殿などの建物に置かれていたことから、当初は木製でした。時代が下るにつれて、屋外に置かれるようになり、江戸時代中期以降には雨風に強い石製のものが多く設置されるようになります。

狛（こま）とは古代の朝鮮国・高句麗こうくりの呼び名である「高麗」を指し、狛犬は高麗犬の意味とする説があります。しかし、狛犬の起源は仏像の前に置かれていた2頭のライオン（獅子）が起源であり、日本に伝来した後に独自の姿へと変化したと考えられています。一般的に狛犬は左右一対で、一方が口を開けた阿形像あぎよう、もう一方が口を閉じた吽形像うんぎようです。口を開けているのが獅子であり、口を閉じて頭部に角のあるものが狛犬を表しています。時代が新しくなると「獅子」と「狛犬」の区別がなくなり、狛犬と総称されるようになりましたが、正しくは「獅子」と「狛犬」が組み合わさった姿です。

町内の石製の狛犬は、昭和時代に奉納されたものが多く見られますが、上六川地区かみむつがわの天石神社には江戸時代に

さかのぼる狛犬があります。この狛犬は社殿前にあり、向かって右側に阿形像、左側に吽形像が置かれています。像の高さが約63cmと中型で、大きさや姿は同じような表現となっていますが、吽形像の頭には角があり、狛犬として作られたものであることが確認できます。また阿形像の台石には「嘉永二酉八月吉日」かえいにとり、吽形像の台石には「西村若中」わかちゅうと刻まれており、嘉永2年（1849年）8月に西村地区の青年たちによって奉納されたものであることが分かります。



吽形像



阿形像



吽形像頭部の角